

# 5万分の1地質図幅「小倉」

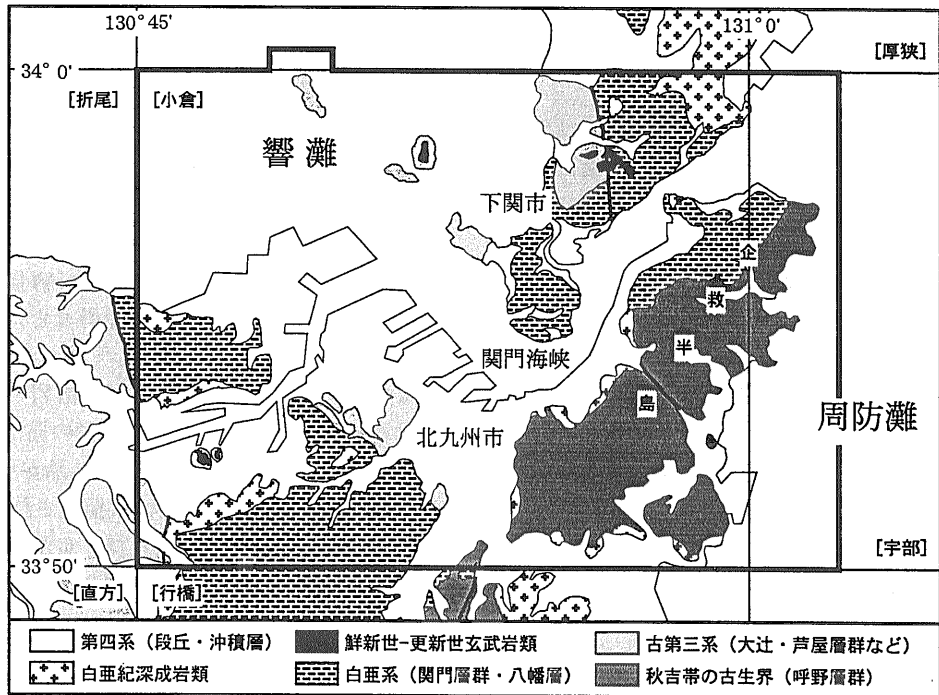
中江 訓<sup>1)</sup>・尾崎 正紀<sup>1)</sup>・松浦 浩久<sup>1)</sup>

風光明媚な関門海峡は常に交通の要衝であり、日本にとって軍事的にも経済的にも大きな位置を占めています。例えば、平家滅亡の地となった壇ノ浦の合戦、巖流島での宮本武蔵と佐々木小次郎の決闘、長州藩による英国艦隊への砲撃、日清戦争後の下関条約締結交渉など、古くから歴史の表舞台に登場します。また海峡を挟む本州側の山口県下関市は、フグの水揚げ地として有名で、反対側の福岡県北九州市には、レトロな街・門司、九州の玄関口・小倉、そして近代日本の発展を支えた製鉄所発祥の地・八幡など、数え上げればきりが無いほど、魅力的な街並があります。小倉図幅はそ

んな街に位置しています。

では、小倉地域の地質とその成り立ちはどの様になっているのでしょうか？ 少し探ってみましょう。

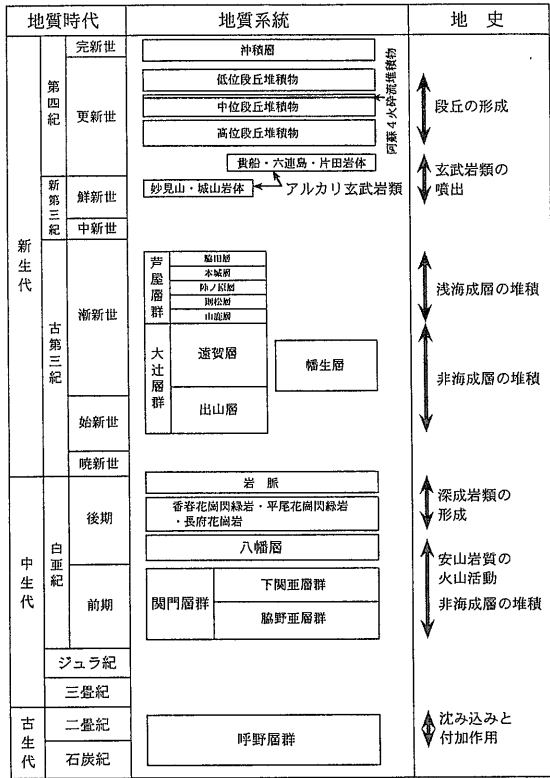
この地域の基盤となっているのは秋吉帯の古生界で、呼野層群と呼ばれています。二疊紀末(約2億5,000万年前)頃、この地域は海洋プレートが沈み込んでいた海溝にあたります。ここで海洋プレート上の堆積岩・火山岩と大陸から供給された砕屑岩とが混ざり合っ大陸側に付加し、大陸地殻の一部を構成するようになったと考えられています。現在では企救半島に露出しています。



第1図 小倉地域周辺の地質概略図。

1) 地質調査所 地質部

キーワード: 地質図幅, 小倉, 関門海峡, 呼野層群, 関門層群, 八幡層, 花崗岩, 大辻層群, 幡生層, 芦屋層群, アルカリ玄武岩



第2図 小倉地域の地質総括図。

時代が下ると、呼野層群を形成した海溝は現在の南九州へと南下し、小倉地域周辺は次第に陸化していきました。やがて白亜紀になると、陸の一部に大きな湖や沼、そしてそれに流れ込む河川に地層が形成され、それと同時に活発な火山活動が起こりました。これらによって形成されたのが、関門層群や八幡層(約1億3,000万-8,000万年前)で、小倉地域の多くの場所で、呼野層群を不整合に覆って広く分布しています。この頃、何種類かの恐竜が棲息していたらしく、小倉南区の関門層群から恐竜の化石が発見されています。

この頃の火山活動をもたらした地下のマグマが、冷えて固まったのが深成岩類(約1億2,000万年-8,000万年前)です。深成岩類は岩質・帯磁率・主

成分及び微量化学組成などの違いから、<sup>かわら</sup>香春花崗閃緑岩・平尾花崗閃緑岩・長府花崗岩の3つに識別されています。深成岩類は山地を構成する呼野層群や関門層群に比べると風化しやすいので、雨風や流水に削られて地形的に低くなる傾向があります。現在では、山地の裾野や洞海湾・関門海峡の周辺などでわずかに露出しているほか、洞海湾・関門海峡の海底にも分布しています。

古第三紀になると、呼野層群や関門層群を基盤として北西-南東方向に延びた溝状の盆地が、幾つかの地域に分かれてできました(約5,000-2,000万年前)。この盆地に堆積した地層は、下位の大辻層群・幡生層と、上位の芦屋層群に区分されています。大辻層群と幡生層は淡水-汽水性の環境下で堆積した地層であり、多くの石炭層を挟んでいます。明治以降、大辻層群中の石炭が盛んに採掘され、蒸気機関や溶鉱炉の燃料として利用されました。日本初の西洋式の製鉄が北九州市の八幡で始まったのは、単なる偶然ではなく、この様な地質学的背景に支えられていたからなのでしょう。一方、芦屋層群はほぼ浅海成層のみからなります。響灘に浮かぶ西山・馬島・藍島の海岸からは、貝や鮫の歯の化石を採取することができ、海鳥やクジラなどの大型化石を見つけることもできます。

さらに中新世以降に時代が下ると、現在の日本海沿岸に玄武岩を噴出した火山活動が起こりました。小倉地域では、新第三紀末(約250万年前)に北九州市八幡西区に、第四紀初頭(約160-110万年前)に下関市の六連島・貴船町などに玄武岩が噴出し、現在小規模な岩体として見られます。これらはアルカリかんらん石玄武岩の溶岩と火砕岩から成ります。六連島の玄武岩溶岩の発泡部分には直径2cmに達する金雲母の晶洞結晶が生成していることで有名で、天然記念物に指定されています。またこの島では、ウニのアルコール漬け発祥の地らしく、学校帰りの子供たちがウニをおやつに海で遊んでいます(うらやましい!).